特集：人間科学の現状と課題によせて

1977年４月，全国三番目の人間科学科として発足した本学科が，20周年を迎えるに当たり，特集を編むこととなった。特集：人間科学研究は，今回で三回目であるが，事実上，四回目であるということもできる。人間科学科発足直前に，本『紀要』の前身，『論集』（札幌商科大学学会・札幌短期大学学会）は，〔人文特集号〕として刊行された。この号には，直接，「人間」を主題とする数編が含まれていただけではない。この号の趣旨は，編集委員（田村一郎氏・渋川正憲氏）による「はじめに」において，「今回は，『人文学部』構想をさらに深め，［より総合的な『人間科学』作りの一端を担う］研究者相互の自覚的交流を促すため，『人文特集号』を組んでみた」と示されていた。この視点は，その後，学科として，系統的，組織的に追求されるべき課題を提起していた。この「研究者相互の自覚的交流」は，学科創設準備段階から学科創設初期においては，人間科学読書会として取り組まれ，その後，教育課程の再検討と結んで，1980年秋に発足した人間科学研究プロジェクトチームを中心とする活動へと続いた。この間の，学科創設５年余の成果として，1983年12月，「特集：人間科学研究(1)」が公けにされた（本『紀要』の前身：『論集』第34号）。私は，このとき，「特集・人間科学研究によせて」のなかで，つぎのように書いた，「今回の特集が，人間学および哲学，思想関係の諸論稿で占められていることは，このような［他大学の人間科学科および類似学科の多くのように，社会学，心理学，教育学などの専攻制を採らず，人間に関する三つの問題領域構成を採ったという］成立事情のもとで苦闘する本学科にとっては偶然ではなく，意味のあることなのである」と。そして，「われわれは，本特集につづいて，第二，第三の歩みを，とりわけ，各個別科学の領域からの人間研究のアプローチとして，今後，ひきつづき，特集として組むことを期している」と結んだ。ここで期待した「第二の歩み」は，その二年後，「特集：人間科学研究(2)」として実現した（本『紀要』第38号，1985年12月）。この特集は，一編を除いて，哲学・思想関係の論文で占められていた。このことについて，「特集：人間科学研究(2)によせて」のなかで，林善之学科長（当時）は，さきの私の一文に触れつつ，つぎのように問題を提起した，「単に個別科学を追究した結果が人間科学と結びついたというなら，人間科学科をつくった意味はない。個別科学からの人間研究のアプローチはもちろん必要であるが，共同研究から生まれる総合化された人間研究を早急に推し進めるべきである。研究が総合化されることは，一方でカリキュラムも総合化されることを意味する」と。

その後，今日まで11年間，本学科はその総力を，まさにカリキュラム改革に傾注してきたというも過言ではない。三回にわたる将来構想の試みは，いまなお，その途上にある。この間の取り組みの過程で，われわれは，人間科学科のカリキュラムの改革は，人間科学の原理を根拠として求めるということをあらためて痛感させられた，といってよい。当然のごとく，1996年８月から人間科学研究会が再開されることとなった。時あたかも，学科創設20周年にさいし，「特集：人間科学の現状と課題」を編むことができたのも，このような取り組みの結果である。しかしなが

ら，「共同研究から生まれる総合化された人間研究」という課題をわれわれは，なお，今後の課題として残さざるをえなかった。本特集にもみられるように，それは，全国的な傾向でもあるが，人間科学，人間諸科学，そして人間学，総合人間学などの概念が，それぞれの論者によって，使用されており，統一される状況には未だない。将来，「大理論」としての人間科学論が誕生するであろうが，その前段階としての，過渡期としての現時点においては，いくつかの「中距離（中射程）理論」が共存せざるをえない。将来は，人間科学会が結成されることになるであろうが，現時点では，われわれは，全国的な人間科学会の一員として，人間科学を論じている訳ではない。いずれかの「人間に関する，人間を冠する」学部・学科の一員として，問題を論じているのである。そのさい，それぞれの学部・学科のつくられかた（規定する条件）により，いくつかの類型が生ずる。いくつかの「中距離（中射程）理論」の共存は，このことと無縁ではない。本学科もそのひとつの類型に属する。したがって，本学科に特有の事情といわれるが，それは特殊な事情ではない。この20年間の過程は，本学科の人間科学をめぐる問題が，つぎの三つの問題によって構成される問題群であることが，しだいに明らかになってきた過程でもある。その問題群とは，（イ）人間科学と人間学との間の，（ロ）人間科学の研究と教育との間の，（ハ）人間科学の専門教育と一般教育との間の，三つの問題の複合体である。われわれは，ようやく，この問題群を総体として射程距離にとらえる時点に達したといえよう。学科創設20周年を記念するとは，私見によれば，これらの問題群を一面化に陥ることなく，総体として，解決する道に一歩踏み出すことにほかならない。本特集号が，その貴重な契機となることを期待いたしたい。

末尾ながら，本特集号にご理解をいただき，ご多忙のなか，玉稿をお寄せいただいた御三方，水島恵一文教大学長，春木豊早稲田大学教授および田村一郎鳴門教育大学教授に，心よりお礼申し上げるとともに，深く感謝の意を表させていただきたい。

なお，本特集号の作成にあたっては，酒井人文学部長・本学会長をはじめ，学会幹事の北爪真佐夫，岩城禮三，大瀬隆の諸氏，および奥谷浩一，川合増太郎，清水信介，滝沢広忠の諸氏の協力をいただいたことを記し，この場を借りてお礼を申し上げたい。

1997年２月　人間科学科長　廣　川　和　市